

ふるさとの
かたりべ

第 10 集



発行 嘉瀬ふるさとを探る会



ふるさとの

かたりべ

巻頭言

「文化は地域固有の財産」



金木町長 田中勇治

「ふるさとのかたりべ」第十集の発刊にあたり、嘉瀬ふるさとを探索会の会員諸氏にあらためて敬意と謝意を表します。

「ふるさとのかたりべ」に込められている会員皆様の郷土への愛着心、また学究欲は私たちにとって大いに励ましを受けるものであります。

文化はそれぞれの時代の人々の欲求によって移り変わりながらも「ふるさと」のシンボルとして、その土地に住む人たちの特徴、その土地の風土と融合し地域固有の社会財産であります。

最近の世界の情報も瞬時に伝達される情報化社会となり、特に生活様式面では都会化のみならず、物によっては外国化されるなど生活の便利性、日常の暮らしは飛躍的な発展を遂げ、生活形態、産業形態の変化が価値観の多様化という現象に見られるようになってきました。

暮らしの便利さが同時に地域社会の住み良さとなると、今一度郷土の

原点をみつめ、住んでいる土地のらしさ、特徴の必要を感じさせられます。

このような時、「ふるさとのかたりべ」から郷土の歴史、文化といつでも接することが出来ることは大変喜ばしく、私としても、地域固有の文化を育んでいくことが素晴らしい郷土づくりへの大事な視点であると思うのであります。これからも、嘉瀬ふるさとを探索会の益々の御活躍を希望します。

目次

《表紙》……………清久溜池の白鳥
解説……………山中正津

《巻頭言》文化は地域固有の財産……………田中勇治

嘉瀬百年の流れ……………木立民五郎 1

「干支」と気象十三周期に冷夏はくるか……………木村治利 5

大地主と大作家と小作人……………秋元惣之進 14

八幡様と白狐……………山中長三郎 18

ふるさと人名録……………木立民五郎 20

思い出せば懐かしき人々……………岩田春海 24

衣文化・津軽裂織を織る……………木村治利 32

七面大天女（七面様）……………秋元惣之進 35

雲祥寺聞書（雲祥二十三世東堂）……………一戸哲三 37

青森県津軽農民の関連年表……………秋元惣之進 38

貧農と周旋屋……………秋元惣之進 39

聞き書き津軽弁・嘉瀬瀨言葉（その二）……………木村治利 41

五十年前を思い起せば……………山中正津 44

Ⅱ津軽の里から消えた食べ物Ⅱ……………山中正津 50

◇水あめ◇ごり豆◇甘酒……………山中正津 50

太平洋戦争と日本の平和……………山中正津 50

村の忠魂碑を大事にしたい……………小山内嘉一郎 53

耕作話……………比良貞彦 54

むかしの稲作あれこれ……………山中正津 61

嘉瀬の小話（その一）藁乳穂の陰の赤ん坊……………山中正津 61

嘉瀬の小話（その二）弥吉貝味噌……………山中正津 61

嘉瀬の小話（その三）老いても……………山中正津 61

（寄稿）前だれ（エプロン）……………もりひらかずこ 66

嘉瀬百年の流れ

木立 民五郎

明治の世に入って、津軽藩の各村からの財役人夫の割当も殆ど無くなり健全な若者がどこの部落にも溢れていた。

そんなある日、九州鹿児島で戦争が始まり、嘉瀬の部落にも輻重の役割で、戦争参加者が一人割当された。

戦死ということは考えられなかったが、遠い薩摩の国ということは、津軽人には想像もつかない未知国の旅出だった。

屈強な若者数十人は日本海岸鯨ヶ沢港に集結され、船で転々海の旅を続け大坂に着いた時は、世にいう西南の役は終わっていた。

嘉瀬出身鳴海永八の武勇伝をきくことが出来ないが出征兵士第一号は鳴海永八その人である。

明治二十二年戸長役場が出来、戸籍、兵事、学事、税務、庶務と、各村々に一戸の行政体形が整い、徴兵制度が施かれ、二十一才の、壯丁が身体検査の上、甲種、乙種、丙種と分別され、甲種合格者が晴れて兵営の門をくぐる富国強兵の時代がやって来た。

明治二十七年令二十八年は今の中国、支那を相手の戦争に幾人かの強

健な若者が祖国を離れて支那大陸に渡った。

戦争は連戦連勝のうちに日本の勝利で終わった。

十年経って今度はロシアという強大な国と戦火を交えることになり、嘉瀬からも十数人の出征兵士が故郷を離れて行った。

小栗崎棟方万九郎もその一人である。敵地で負傷し、捕虜となり、戦争集結となってシベリヤ鉄道を貨車に乗せられドイツ国ハンブルグ港から船で日本に送還されたが当時の日本人には不名誉極まりな事柄で、故郷嘉瀬に帰ってからは全く無口な人となり、日露戦争参加の兵士としては全く知らない人ばかりで、本人も戦争の話など語ろうとしなかった、老境に入って部落財産区の議員に推されて村役場に入りする時になって年若い役場の戸籍係と親しくなり、ポツリポツリ日露戦争物語りをする様になった。

銃弾でうたれ、意識不明の時ロシア兵に発見され、後方野戦病院に運ばれ、手厚い看護を受け、歩行出来る様になった時の心境の変化など、日本の軍隊で受けた教育からすれば、舌をかみ切って死んでなければな

らない愚かしき、力強く生きなければと思った心境など、役場の当直室で若い戸籍係に夜遅くまで語ってきかせた。

さすがにシベリア鉄道の貨車で送還された時の食べ物、牛豚の骨をくだいたダシ汁に麦粉を少々まぜたスープに黒いパン一片と粗末なものだったが約二十日程の列車の旅は先の明るい旅だった。

大正時代に入って、ニコライスク事件としてシベリア出兵があった。嘉瀬からも幾人かの参加兵士が出ている。詳かでないが、松川専五郎、中村正一、山中利助、吉崎男治等は記録にある、その中で、中村正一は上等兵で帰還し、外三名は一等兵で帰還した。

松川専五郎に至っては兵隊達の時計の修理から細かい機械類の修繕に優れ、貴重な存在の兵隊でしかも実役四年の最高の経歴の持主だったが一等兵の階級に終わった。

軍国日本の華々しい時代のシベリア出兵について嘉瀬出身者のこれ等勇士が忘れ去られた歴史を今一度思い起こして見たいものである。

日清、日露の戦争で嘉瀬から出征した兵士の中で金鷄勳章の榮譽に輝いたのは山中定吉と津田男治の二人だけで山中定吉は早く世を去って、彼の晴れ姿を記憶している人は殆どない。その反面功七級受賞の津田男治は、小学校の三大節、あるいは村の晴れの行事には胸に金鷄勳章を飾り欠かすことなく参列した姿は特に光って長く人々の臉に残っている。

山中定吉の功六級は幻のうちに終り村の人々が金鷄勳章の話が出ると津田男治の功七級が最高の誇りとされた。ガニオンチャとして通り数人の兄弟はあったが津田男治は、ガニ系統の中で特に日露戦争勇士の一人として名を挙げた。

昭和初期の六年七年と満蒙大陸が日本軍部台頭の国策が遂に満州事変

もあり、日本最初の拳斗クラブを創設者でもあり、時の右翼の頭目、頭山満の右腕として活躍したが四十一才の若さで亡くなった。

因に早稲田在学中は相撲部の主将をつとめ柔道三段嘉瀬では通称カドのアンチヨと云って明治三十年生まれである。

嘉瀬には早くから三ヘゲと云って若い年齢で口ヒゲを生やした三人の名物男が居た。

松川専五郎を加えると四人になるかも知れないが松川専五郎はどうしたことかジャンボで通り、三ヒゲは舛甚万作、吉崎十造、山中与七の三人が占めていた。

舛甚万作は農会の技師であったが昭和十七年頃満州国関東州にリンゴの栽培を目的とした移住民団を結成し親類縁者を引連れ渡満し正月休みで村に帰った時、雪の降る路上で倒れそのまま息を引取った。

嘉瀬村では村葬の礼をもってこれを葬った。

移民の歴史については、大正時代新しやのコンチヨという人が南米移民の幕を開き、昭和の初期に入って車町のコバシ末太郎こと飯塚末太郎が南米移民を実行している。

昭和十四年頃中柏木出身の杉山金造が村長時代、多分飯塚末太郎が村長の杉山金造と小学校時代同級生であったと思うが杉山村長宛に南米に居る飯塚末太郎から手紙が来て、杉山君、君は今故郷嘉瀬村の村長としていると風の便りできいているが、私は現在南米に移住して肩書等は全くの無冠だが、今私に金の茶釜を九十九積んで日本に帰らないかと誘う人が来て私も私は断るネ。

それ程私は生甲斐のある生活の中に居るよ。そんな手紙を杉山金造の机の上で見た記憶がある。

となり、青森五連隊が青森港から出征した時は嘉瀬出身の現役兵が幾人もはしけに乗り、銃を白布で巻き沖合輸送船に乗り込む勇姿を見て感激したものである。正に天に代わりて不義を撃ちの軍歌も枯れるばかりに兵士を見送ったものである。

昭和八年、九年の凶作から兵隊を送った農村疲弊は甚しく昭和十一年二月二十六日は東京は例年に無い大雪となり所謂二・二六事件と呼ばれる時の政府要人が昭和七年五月起きた五・一五事件と同じく軍部の若手将校が首相官邸に乱入。時の総理を暗殺し政治の変革を図ったが目的を達さず四年後の昭和十一年は総理官邸から大蔵大臣、内大臣と近衛聯隊の兵隊を動かし春早い東京の雪を血で染めた。

軍部青年将校の勢いは翌昭和十二年七月に入って支那虚構橋で端を発した銃声は止まることを知らない引き金となり日支事変から、上海事変となり、遂には大東亜戦争の結末を生むに至った。

動員令が降り、役場の三号用務員がかばんに赤紙令状を入れて走った光景は忘れることの出来ない緊迫そのものだった。

一度に三十数通の令状が嘉瀬役場に来た日もあった。そして最初に戦死公報が入ったのは、工藤部隊、山中龍夫その人であった。

大正、昭和の時代に入って戦争と関係なく北方樺太今のロシア領サハリンから沿海側に渡り砂金探索等単身国境を越え、極寒の生活に耐える現地人エスキモー人からアザラシ体操を会得し、青森に帰ってからの名を漫遊とし諸国を走り回った小山内漫遊も嘉瀬が生んだ名物男である。

日支事変最初の戦死者山中瀧夫、名物男小山内漫遊、何でも山中利一の兇分で、大正時代の後期山中利一が渡米した時ニューヨークの波止場で黒人労働者数人に喧嘩を売られ一人残らず海に投げ飛ばした武勇伝等

第一回芥川賞に輝いた作家石川達三の「蒼眠」を地で行った二人の先人が嘉瀬生まれの人である。

嘉瀬は昔から大工職人の多く出た村だった。

職業柄、早く家を飛び出し、諸国の風習を知り、晩年になって生れ故郷に帰り余生を静かに過すのがこれ等匠の道だった。

車町には土岐五郎吉と白いアゴ髭の沢田西之助も諸国モノ知り名物の中に入る。

土岐老人からは明治初年の頃まで現在の八幡宮西隣りの西館跡の話や、北海道漁場でフグの中毒に出会った時の處置についてその実験談をきかされたものだ。

西館の広場は山林盗伐の罪人刑場で主として五十タタキと百タタキと答打刑が行われた。

罪人の泣き叫ぶ声が部落の人を大きな恐怖で伝ったと話してきかせた。

フグ中毒は昔化学肥料の行き渡ってない頃、漁場ではとれ過ぎた魚は浜辺の大釜に入れて、魚粕をつくった。

魚を煮て砂浜に乾かすのだが煮加減を見るに暗くなるとローソクの光りで大釜を見る時、ローソクのしづくが釜の中にたれるとフグは忽ち溶けて形もなくなってしまうので漁師はフグはローソクによって全くの水に帰することから、フグの毒にはローソクが最高の中和剤と漁師らしい発見を各地で実験していることを話してきかせた。

後年下北脇野沢港に泊まった柵組合の役員七・八人が宿で魚屋からフグを買って焼いて食べた時、誰かがどうも中毒気味だと騒ぎ、その時この一件を話したらみんな宿屋の仏壇に走って食べたわ食ったわ生のローソクをむしゃむしゃと頬ばり、後で脇野沢のフグには中毒が無いことを

知り、翌日もローソクのゲップが出てどうしようもない笑い話もある。

嘉瀬役場の近くに住んでいた沢田西之助も奇人の一人である。

農機具等はすべて自分考案のものを使用し部屋を覗くと炉端にキモリ、シラケ虫、蛙等を串刺にして焼いていたのを見たことがある。

その他馬の仙痛腹痛病をピタリととめた獣医はだしの小栗崎の松川勘九郎、馬の尻尾につかまって厩にかくれていた河童を助けてやった御返返しに整骨術を伝授された鳴海万次郎の伝説。

部落郷倉破事件で青森県内警察官を動員させた食糧分配の大騒動。

人生の大半を獄中で過ごし北海道網走番外地にその名を残している吉崎豊常、津軽鉄道を酒の勢いでストップさせ一ヶ月位の重傷で済んだ伊藤亀吉、一頁二頁で書き尽せない伝記の人が嘉瀬百年の流れに漂っている。

民謡、歌手、踊り手に至っては数え切れない程の名手、達人が明治の終りから、大正、昭和の年代に亘って輩出している。

奴踊り唄い手としては弥四郎辰から手ほどきを受けた弥四郎辰の分家弥次郎妻カネコ、唄の元祖と稱された黒川桃太郎も及ばなかった名手中村要作ことイシアニ要作、津軽唄会ではいつも最高賞で黒川桃太郎はその次の賞に甘んじなければいけなかった。何れも嘉瀬出身であった。

桃はついに意を決し、嘉瀬で唄を歌っていても、又イシアニ要作が健在である限り、自分の最高は無いと思ひ、北海道に渡り、放浪十数年北海道で津軽民謡の名を高め嘉瀬のモモとなって青森に帰り、昭和七年には生まれ故郷の嘉瀬で三日間齊藤直衛劇場で唄会を催し、大入満員の盛況裡に終った。

そしてその翌年青森市の劇場裏の小部屋で淋しい生涯を閉じた。

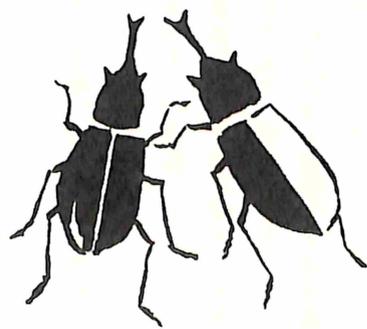
要作、桃の居ない嘉瀬の民謡を支えたのは、小栗崎の松川孫作、小山

内漫遊、木村治一郎、鎌田稲辰、鎌田稲一、小松一声、津田半蔵、踊り手としては山兵別家の山中要吉、斉藤直衛、斉藤由八、吉崎正光かつて隣町の八源津島文治が衆議院の選挙演説で「量は質に変ずる」と題して嘉瀬の民謡を話したことがある。即ち「私の隣りに嘉瀬という部落があるが、この部落はこぞって民謡愛好家が多く部落に唄会があると劇場はいつも満員、県下、民謡大会で三年連続優勝した鎌田稲一もこの出身であり、鎌田につぐ唄い手はまだ続々と控えているのです。」

これは正に量は質に変ずるよい例でないかと話したのを覚えている。津軽三味線に至っては嘉瀬こそ原点であり、神原の仁太郎、白川軍八郎をとりあげているが仁太郎に三味の手ほどきをした人は嘉瀬の鎌田松四郎の父親であったことを忘れてはならない。

こうして書き絞って見るとまだまだたくさんの人名が浮かんでくる。いつの頃だったか「かたりべ」に嘉瀬人名録と、嘉瀬水利史を投稿したことがある。編集子の都合で掲載出来なかったが、今その原稿は見当たらない。

思い出すままに、水が流れる様に嘉瀬の百年の歳月をたどって見たのが百年の流れである。



「千支」と気象

十三年周期に冷夏はくるか

木村治利

「天の時は地の利に如かず、地の利も人の和にしかず」とは、昔からの言い伝えである。天の与える機会は平等であるが、低温の年にもよく稔る土地があるもので、これを地の利がよいというのである。

農業は、農民にとって生命線である。しかも農業はその年の気候風土に左右され易い。

異常な冷害年を多く経験してきた農民は、毎年毎年の経験を大事に積み重ね、これを記録し残している。

安永五年（一七七六年）南津軽郡田舎館お豪農中村喜時が編集した「耕作晰」は、八幡神社に村人が寄り合い、酒をくみ交しながら耕作談義の花を咲かせた。小作人五十七人の述記であるといわれる。

藩政時代の飢饉といえば、元和期、元禄期、宝暦期、天明期、天保期の五大凶作があげられる。

中でも天明二年（一七八二年）から始まった天明の飢饉は、三年、四年、五年、六年と五年間冷夏が続いた。

その天明二年の天気図が、昭和五十五年に再現した。春から秋へ直

通した夏のない年であった。稲は青立ちのまま結実せず、嘉瀬地区の三分の一が皆無作となった。

そして昨年平成五年、天明の飢饉以来の大凶作に見舞われた。低温と天候不順の為であった。金木町の作況指数は十七、十a当り収穫量一〇六kg、前年にくらべ五一九kgの減収であった。

このように昔から天候不順は周期的にやってきて、農作物に被害を与えている。

古来より「その年の豊凶作は「千支」によって占ってきた」といわれる。

「千支」と気象は関係あるとは考えられないが、自然現象は周期的に変ってやってくる。

一五六四年永禄七年甲子から一九九三年平成五年癸酉まで「千支」による豊凶年を調べ周期的に関係があるのかどうか調べてみる。

古来より「千支」による豊凶年は、

(1) 「巳年は凶作が多い」